

# 日本一のみょうが産地は こうして生まれた（下）

ゲスト／高橋 一吉（高知県JA土佐くろしお 代表理事組合長）

## 第44回ゲスト

高知県JA土佐くろしお 代表理事組合長  
**高橋一吉**



たかはし・かずよし

1961年高知県生まれ。79年旧須崎市農協に入組。営農部販売課、金融部信用課課長補佐、吾桑支所長、金融部信用課課長を経て、2019年代表理事常務、22年代表理事筆頭常務、25年代表理事組合長に就任。水稻、みょうが、ブンタンを育て、出荷している



## ● インタビューとまとめ

三重大学名誉教授  
京都大学学術情報メディアセンター研究員  
**石田正昭**



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』（ともに編著、家の光協会刊）

\*前回の記事は[コチラ](#)から

## 日本一のみょうが産地はこうして生まれた（下）

人口減少と高齢化が進行し、南海トラフ地震も予測される高知県。みょうが産地として盛り上がっているJA土佐くろしお管内もその例外ではない。その困難をはねのけるため、農業に関心の高い若い女性たちを集めて「みょうがパーティ」を開き、地域活性化をめざしたいとする高橋一吉組合長にその抱負を語ってもらった。

### ■ 南海トラフ地震に備えて

**石田**：わたしの住む三重県も同じですが、高知県は周期的に大地震に見舞われていて、次の南海トラフ地震への備えが急務となっています。JAの中心施設である大間野菜集出荷センターも移転する計画ですね。

**高橋**：そのとおりです。大間地区は津波危険地域に入りますので、高台の本所向かい側の山を削って移転する計画です。標高はおよそ35メートルで、山林の買収をほぼ終えましたので土地の造成を始めるところです。

**石田**：国費とか県費は出ますか？

**高橋**：土地の造成には出ませんが、建物の建設には国、県の補助金が出ます。令和11（2029）年度までに取り掛かったら、通常50パーセントの補助率が60パーセントまで引き上げられます。ただ追加分の半分の5パーセントは県の補助という条件が付きますが…。

**石田**：現在、農水省は共同利用施設再編の補助率を50パーセントから3分の2程度まで引き上げる検討を進めています。仮にそれが通ればJAの負担はより軽くなりますね。

**高橋**：そう思いますが、資材価格や労賃の上昇が激しく、建設費そのものが高騰しており、補助率が上がってもJAの負担が軽くなるとは限りません。農産物単価も上がっていますが、それ以上に重油などの資材価格や輸送費も上がっていて、厳しさは増すばかりです。生産者には今まで繰り返し説明してきましたが、今一度しっかり説明しなければならないと思っています。

**石田**：集出荷場等減災対策積立金の目標額は5億円、満額積んでいますね。

**高橋**：とても5億円では足りません。追加負担が必要です。農家数も減っており、10年先、15年先の負担をどう考えるか、これが大きなポイントになります。将来の減価償却費を残った生産者だけが負担するのは公平ではありません。そのあたりのご理解をいただいて初めて国、県の承認がもらえます。

**石田**：BCP（事業継続計画）の見直しも必要では？

**高橋**：そのとおりです。BCPは集出荷センターだけではなく、JA運営全体に関わる問題ですから、わがJAだけではなくJAグループ高知としても計画の見

直しを進めるとしています。担当は総務課です。

**石田**：先ほど拝見しましたが、本所横に購買倉庫「蔵」や重油タンクが設置されています。本所全体が避難所の位置づけになっています。

**高橋**：そうです。本所は二次避難場所に指定されていて、炊き出し用具とか、テントとか、椅子・机とかを購買倉庫内に備えています。須崎警察署とは大規模災害時における施設使用の提携を結んでいます。

停電・断水を想定した避難訓練も行っていて、これに女性部本部役員たちも参加しています。井戸水を飲料用にする浄水装置(緊急対応型逆浸透膜浄水装置)を試験運転したり、ローリングストック用の備蓄米40袋で約120個のおにぎりと、大鍋で40人分の豚汁を調理したりしました。

重油タンクはハウス燃料費を低く抑えるために設置したものですが、大規模災害時にはこれを使って必要電力を貯えるように発電設備も備えています。

**石田**：なるほど。

**高橋**：それと、職員の避難訓練は年1回、各地区の避難訓練は年3回行っていますが、いざというときにどう動くのが望ましいか、更なるシミュレーションが必要ですし、職員一人ひとり、住民一人ひとりの理解をどう深めていくかも重要です。



上段左／職員は年1回炊き出し等の訓練を行う  
上段右／須崎警察署と南海トラフ地震などの大規模災害時における施設使用の提携を結んでおり、防災倉庫等の視察に訪れた  
下段左／訓練では井戸水をろ過して飲み水にできる浄水装置も体験

## ■ JAがつくり育てた園芸産地

**石田**：JA土佐くろしおの組合員組織は多彩です。青年部のほかに4Hクラブと壮年部がありますし、女性部には「ぐりーんメイト」があります。

**高橋**：新規就農者の激励会を4HクラブとJAの共催で毎年開いています。4Hクラブの基本は独身(男女を問わない)であること。もともと4Hクラブは県が関わって設置されましたので、青年部とは別の扱いになっています。

**石田**：年齢層は？

**高橋**：独身が基本ですから、おおむね20歳代で構成されています。結婚したら青年部へという流れです。壮年部は40歳代後半から50歳代で構成されていて、その年齢になったら青年部から壮年部へ移ります。ただ年齢できっちり分けてい るわけではありません。

一方、ぐりーんメイトは10年前に結成された新しい女性組織です。農業に従事する若手女性グループで、食育や地域のイベント開催を通じて農業の魅力やたいせつさを伝えています。県外での消費宣伝も行っています。位置づけとしてはフレミズ組織に近いものです。



上段／ぐりーんメイトは、JAをよりどころにさまざまな活動を展開。みずからが学ぶだけでなく、子どもたちへの体験にも積極的にかかわる  
下段／女性部とぐりーんメイトは、年に数回交流を行っている

**石田**：農家組合とか実行組合と呼ばれる集落組織はありますか？

**高橋**：ありますかが少ないですね。一部水稻農家が残っているところにあるだけです。比較すると津野町や中土佐町に多く、須崎市は少ない。施設園芸に特化した結果だといえます。

**石田**：園芸組合はありますか？

**高橋**：30年以上前に須崎市池ノ内地区にありましたが、今はあります。園芸農家はほぼすべてJAに結集しています。JAの集荷率は96～97パーセントです。

**石田**：それはすごい。JAがつくった園芸産地だからでしょうね。

**高橋**：JAの地域組織としては支所運営委員会があって、各地区の運営委員さんに集まっています。総代や理事の推薦母体もそこにありますが、総代や理事のなり手が少なくなっているのが現状です。

**石田**：どこも同じですね。

**高橋**：年間に600名くらい、JA管内的人口減少が起こっています。あと5年もすると高齢化率が5割を超えると予想されています。

正組合員も5年前は3,200

名くらいましたが、現在は2,800名くらいになっています。5年で400名、1年で80名ずつの減少です。集落座談会も成立しにくくなっていますので、今年度から別途施設農家だけを対象とした座談会を開いています。すでに13か所で開催しました。



支所運営委員会は、総代会前に全9地区で開催

跡継ぎがいるのは、ほぼほぼ施設農家だけとなりました。みょうが生産者に限れば、5年間で40名くらいの新規就農者があります。お金が稼げるという理由もありますが、休みがとりやすいという理由のほうが大きい。若者にはこれが大きな魅力となっています。

**石田**：休みがとりやすい理由は何でしょうか？

**高橋**：きゅううりやししどうは、期間中ほぼ毎日収穫しなければなりません。収穫しないまでも見回りは必要です。1日あいだを空けるとたいへんなことになるからです。その点、みょうがは1日や2日休んでも問題ありません。融通が利きやすいのです。スリッパで動き回れるほどハウス内はきれいですし、車輪の付いた椅子に座ったままで仕事ができます。

今後のことを考えると、みょうがといえども生産者は減るでしょう。ただ日本一の産地ですから出荷量は減らせません。その対策としては空きハウスの流動化を進めるとともに、雇用（外国人）を今以上に入れて一人ひとりの規模拡大を図ることが必要と考えています。

## ■ 地域活性化をめざして「みょうがパーティー」を！

**石田**：一点お聞きしたいのですが、女性で男性以上に栽培感覚に優れた人や経営感覚に優れた人がいますよね。そういう人たちがぐりーんメイトに入っても「ちょっと違うかな。もっと技術的な、もっと経営的な勉強をしたいな」と考え

るような女性はいますよね。

**高橋**：それはあります。

**石田**：そういう女性はどこに？

**高橋**：現状、ぐりーんメイトに入っています。ぐりーんメイトは料理教室や県内外での消費宣伝のほかに納税関係の勉強会も開いています。

**石田**：わたしはそういう人たちこそ青年部に入つてもらひ、男性と一緒に栽培や経営の勉強をする機会があつてもいいのではないか、そう思います。青年部は男性だけのものではありません。女性にも開かれた組織になってほしいと考えています。

**高橋**：なるほどね、おっしゃるとおりで、栽培感覚と経営感覚は必ずしも両立していません。栽培はいいけど経営がねという生産者もありますし、経営はいいけど栽培がねという生産者もあります。JAの経営診断ではそのあたりをしっかりと「見える化」することがたいせつで、男性とか女性とかの区別があるとむしろ「見える化」しにくくなります。

**石田**：どちらかというと、女性のほうが「しっかりと」しているのでは？

**高橋**：土佐弁に「じがつむ」という言葉があります。コツコツ仕事をして、やめないという意味がありますが、この点では女性のほうが優れています。巡回指導でハウスへ行っても、ご主人は外に出てきて一服吹かすのがふつうですが、奥さんはそのあいだ一生懸命仕事をしています。

**石田**：その旦那さんですが、部会で何か発言することはありますか？

**高橋**：発言というか、話を聞いて帰る人のほうが多いかな。

みようが部会の運営委員会には各地区2名ずつ女性役員が入っています。彼女たちは積極的に発言しています。この前の運営委員会でも「夏場の高温対策（ドローンを使っての遮熱塗料のハウス塗布）はどんな結果でしたか」などと質問していました。鋭い質問でした。

独身女性で農業をしている方も結構おられます。ですが、彼女たちはぐりーんメイトにも女性部にも入っていません。そういう女性たちに青年部に入つてもらひ、組織風土をえてもらいたい。というより青年部としてもそういう女性たちを積極的に青年部に勧誘し、育てていかなければなりません。JAとしてもそのための支援は惜しまないつもりです。

みようがだけでなく、ユリにもそういう女性たちがいて、高知県ユリ振興協議会の「高知県リリーズファミリー」に加入していますが、彼女たちにもわが青年部で活躍してもらいたい。

本所2階にはテラスがあって、かつては若者たちが集まってパーティーを開いていました。カップルも2組誕生しました。そのような若者パーティーを再開していきたい。高知市などからも広く人を集め、みようがサンドイッチとみようが

ビールで活性化パーティーを開きたいですね。

婚活パーティーという形式ではなく、産地PRの一環としての「みょうがパーティー」という触れ込みで、地域を元気にしていきたい。人口減少をはねのけていきたい。草食系男子が多くなっていますから、若い女性たちの力をお借りしなければならない。これなくして地域は活性化しません。



JA本所2階正面はテラスになっており、組合員や職員の憩いの場に活用したい



須崎市が主催する「須崎市ドラゴンカヌー大会」に、「ぐりーンメイト」「4Hクラブ」「JA職員」の連合チームで参加。若い力が結集して24チーム中11位。出会いの場にも

## みょうがのサンドイッチ

今回のトップ対談では、昨年(2025年)2月、横浜市で開催された第66回全国家の光大会で家の光協会会長特別賞を受賞した深瀬夏枝さんとお会いすることができた。わたしは、彼女の発表した「プロジェクトめだかの学校の挑戦」を西日本地区大会と全国大会の両方で審査員として採点をした。

彼女には高得点を受けた記憶が残っている。というのは、わたしの講演会では女性組織の学習会は「“すずめの学校”ではダメだよ、“めだかの学校”でやるんだよ」と話すことが多かったからである。すずめの学校は「すずめの学校の先生は、むちを振り振りチイパッパ」であるのに対し、めだかの学校は「めだかの学校のめだかたち、だれが生徒か先生か」と歌うからである。深瀬さんたちのグループもこのとおりに女性部活動を動かしていた。

トップ対談では、質問項目に「みょうがサンドイッチ」を含めていたのでその話題で盛り上がり、「では、わたしたちがつくりましょう」と深瀬さんが言ってくれた。女性部担当の農業振興課・小松菜穂さんと一緒にJA直売所「ときっ子広場」に行ってパンなどを調達し、調理して

くれた。

どんなものが興味津々であったが、刻んだみょうがをツナとマヨネーズと塩コショウであったもの、といういたってシンプルなものであった。“シンプル・イズ・ベスト”、とてもおいしかった。聞くと女性部の役員のお一人が考案し、その息子さんが経営する須崎市内の居酒屋で提供したことが始まりらしい。

トップ対談で話題となった活性化パーティーは、このみょうがサンドイッチと「合同会社すさきシェアブルワリー」社謹製の「みょうがPINKエール」で盛り上がろうという企画であった。このビール、須崎市内でしか味わえない希少品で、残念ながら今回は味わうことができなかった。



突然にもかかわらず、大会でご発表いただいた深瀬さん、小松職員がみょうがサンドを作ってくれました